

アラン・ソーカル／ジャン・プリクモン

『「知」の欺瞞　ポストモダン思想における科学の濫用』

田崎晴明ほか訳、岩波書店、2000年

中川 久嗣

いわゆる「ポスト構造主義」とか「ポストモダン思想」とかといった思想の潮流が、この四半世紀ほどの間、世界中でもてはやされてきた。わが国でもご多分に漏れず、1980年代あたりからさかんにこの知的モードが流行し始めた。有名な浅田彰の『構造と力』が出版されたのが1983年のことで、当時、知的ファッションとしてこの本を片手に渋谷あたりのカフェーに出入りするのが今時の若者のおしゃれだ、などという都市伝説も流れたりしたほどだ。同じ大学の法学部に籍を置く私の友人で、やはり世間の流行に遅れまいとして『構造と力』を購入したものがいた。後に彼に聞いたところによると、彼はこの本を開いたのはいけれども、最初からその内容がちっとも理解できず、これが自分と数年しか歳の違わない人間の書いたテキストであるという事実に半ば畏怖の念を感じ、そして半ば当惑し苛立ちながら、結局この本を遠くへ投げ捨てたという。「全然わからない」というのが『構造と力』を読んでみての彼の全感想であった。「ちんぷんかんぷんでよくわけがわからないが、何か深遠なことが書いてあるようだ」というこの印象は、実は彼だけが抱いた特殊個別的な印象なのではなく、実は、ポスト構造主義思想やポストモダン思想といった得体の知れない知的産物の総体に対して、きわめて多くの人々が率直に抱く正直な心情である。誰もがそう思っているが、誰もそれを口に出不さない。それを口にすることは、深遠な思想を理解できない自分の知的能力の低さをはからずも露呈してしまうことにつながってしまうと皆が思っているかのようだ。それでもやっぱり王様は裸だと、誰かが口に出したとしよう。その誰かの言葉に勇気づけられでもしたかのように、一斉に皆がほっと安心し口々に同じ感想を発し始めるのだ。「ああなんだ、自分だけではなかったんだ、みんなだってよくわからなかったんじゃないか」と。

ポストモダン思想に対して真っ向から「王様は裸だ」と大声で叫んだのが、ここで取り上げる『「知」の欺瞞』であり、その著者であるアラン・ソーカルとジャン・プリクモンである。ことの発端はこうだ。日頃からアメリカの大学に広がっていたポストモダン思想の流行に心を痛めていたアラン・ソーカルが、「境界を侵犯すること　—量子重力の変形解釈学に向けて」という、いかにも今はやりのポストモダンのタイトルの論文を執筆した。これは「ばかげた文章とあからさまに意味をなさない表現があふれるばかりに詰め込まれて」おり、かつ「極端な形の認識的相対主義を掲げて」いるもので、そこでは「一連のあきれるような論理の飛躍」が続く。例えば次のような調子である。

「かつては定数であり普遍的であるとみなされてきたユークリッドの π もニュートンのGも、今やそれらがもつ避けがたい歴史性の文脈の中で捉え直されることになる。そして、仮想的な観測者は決定的に脱中心化され、もはや幾何学のみでは定義されなくなった時空点とのあらゆる認識論的な連結性を絶たれてしまうのである。」

(『「知」の欺瞞』294頁、付録A／パロディー論文)

話はここで終わらない。それどころか、ここからが事件の始まりなのだ。彼はポストモダン的な表現に粉飾されたこの「パロディー論文」を、アメリカで人気の高いカルチュラル・スタディーズ誌「ソーシャル・テキスト」に投稿し、それが採用・出版されるかどうか試してみたのである。ところが、この「パロディー論文」はものの見事に受理され、こともあろうに「幾人かの著名な科学者がポストモダン思想と社会構築主義に対して行なった批判に反論するために組まれた「ソーシャル・テキスト」の特集号」(同)に掲載されたのであった。ソールはただちにこの行為が悪戯だったことを明らかにし、「一般のジャーナリズムと専門家向けの出版界に嵐のような反応を巻き起こした」(同)という。このスキャンダルはニューヨークタイムズの一面で報じられたほか、インターナショナル・ヘラルド・トリビューン、ル・モンドといった有力紙でも報じられた。『「知」の欺瞞』は、このスキャンダルの事の顛末を説明し、さらにポストモダン思想の何人もの有名な思想家たちのテキストを引き合いに出しながら、そうした思想家たちのテキストが、いかに科学用語を正確な定義なしに濫用し、一見深遠な思想を語っているようで、実はまったくナンセンスでわけのわからない無意味な内容となっているのか、といったことを事細かく暴露しようとした著作である。この本の中でやり玉に挙げられるのは、ジャック・ラカン、ジュリア・クリステヴァ、リュス・イリガライ、ブルーノ・ラトゥール、ジャン・ボードリヤール、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ、ポール・ヴィリリオといった現代フランス思想を代表する壮々たる人々である。

しかしここで誤解のないように付け加えておこう。まず彼らは哲学や人文科学一般を不毛だと攻撃しているわけではない。ポストモダン思想の一部は難解さというポーズによって内容の深遠さを演出しているが、その内実は単純に中身がないということなのだと暴露することに主要な眼目があるのであって、だから思想や哲学がすべてそうなのだと主張したいわけではない。さらに彼らが問題にしているのは、ポストモダン思想における科学用語の濫用である。純粋に哲学的とされてきた諸概念や用語について文句をつけようとしているわけではない。彼らはポストモダン思想の多くが、厳密な定義や正当な使用法を逸脱して、あるいは明らかに誤った用い方を強行して、ただ自分たちのテキストの深遠さを演出しようとしている点を批判するのだ。トポロジー、空間、有界、極限、位相、ユークリッド空間、虚数、集合、関数、座標系、観測、フラクタル、カタストロフィー理論、カオス理論、線型性、無限、変数、普遍定数、ゲーデルの定理……。こういった概念や用語が何の科学的定義づけや説明なしに濫用されているという。例えばドゥルーズとガタリの次のようなテキスト(ソール

カルとブリクモンはこれを「完璧に意味不明である」(211頁)と断じている。

「科学に取りついているのは、それ自身の統一性ではなく、むしろ準拠平面である。一すなわち、科学が限界のもとでカオスに立ち向かうときのそのすべての限界あるいは縁によって構成されている準拠平面である。それらの縁によってこそ、平面はおのれの諸準拠をそなえるのであって、座標系に関して言うなら、もろもろの準拠こそが準拠平面に生息し、あるいはそれを満たすのである。」(211頁)

科学用語の濫用に粉飾されたポストモダン思想のテキストに彼らが見いだすのは、極端な懐疑主義や相対主義、目くらまし、無意味、意味不明、不明瞭さ、理解不可能、人を煙にまくような議論、うわべだけの博識、疑似科学、知的混乱、自然科学の猿真似、権威を笠に着た議論、尊大さ、学のひけらかし、非合理主義、知的詐欺、知的不誠実さ、臃腫、言葉遊び、神秘主義、判じ物、学識の皮相性、そして欺瞞……………。

ここまで攻撃されると、われわれはソーカルとブリクモンが、ただひたすらポストモダン思想に対する敵意をたぎらせて、あれやこれやとかたっぱしから難癖をつけ、否定のための否定、攻撃のための攻撃を繰り返しているだけといった印象を受けてしまうほどだ。それでは、この著作で批判的となっているポストモダンの思想家たちのテキストは実際にはどうなのかというと、これはもう自分で判断していただきたいとしか言いようがない。おのおのの思想家について彼らの批判の当否を個別に検討する余裕も紙面もない。この場でソーカルとブリクモンの批判は的はずれだと切り捨ててしまうこともできなければ、彼らの批判が全面的に正しいと賛意を表することもできない。ポストモダンの思想家たちのテキストそのものに当たり、さらにソーカルとブリクモンの批判を読み、そうした作業を経たのちに、読者が自分で判断するしかないのだ。これはどちらか一方に軍配をあげるべき類の問題なのではない。平凡な言い方かも知れないが、この2人の著者の批判が、きわめて当を得たものである場合もあるだろうし、反対に単なる無理解からの難癖に終わっている場合もあるのだ。このように言うのが妥当なところであろう。ただ少なくとも、部分的に過度にパフォーマティヴであるからといって、その思想家のすべてを否定してしまうことは、同様に過度にパフォーマティヴであり、幼稚なことであると付け加えておこう。

さらに指摘しておくべきは、ポストモダンの思想が、全体として近代的理性中心主義に対する批判と異議申し立てという共通の目標めいたものを持っているということである。理性中心主義あるいはロゴセントリズムを批判し、それを例えば「脱構築」するためには、理性やロゴスの言葉、合理的論理の使用をこれまで通りそのまま繰り返すことは、一種の矛盾となる。だからそうした伝統的な言葉遣いとは異なる言葉遣いを用いることになる。これはポストモダン思想に好意的な見方である。しかし一方、哲学や思想たるものは、いやおよそ学問たるものは、理性の言葉、合理的論理で語られることなしには、普遍性を獲得できないとも言える。哲学や思想は、文学作品や詩とは、この点で異なるのだ。他者にみずからの思想

を伝え、納得してもらうためには、相手に通じる言葉を話さなければならない。ただ、やっぱりなのは、理性や論理が純粋にニュートラルなものであると言い切ることが出来るのか、ということだ。理性や論理を導入するや否や、そこにその裏面としてある種の権力性が不可避的に伴ってしまうのではないか、というのがポストモダンの主張のひとつでもあるのだ。

さて最初にも述べたが、いわゆるポストモダン思想に対しては、ソーカルとブリクモンと同じようなフラストレーションを感じた者は少なくなかった。この2人の著者はアメリカ人であるが、当のフランス思想界の中においても同様な批判がこれまでも行われてきた。例えばフーコーなどの思想をアンチ・ヒューマニズムだとして批判して有名になったリュック・フェリーとアラン・ルノーは、その著『68年の思想 現代の反-人間主義への批判』（小野潮訳、法政大学出版会、1998年）において、60年代の哲学（すなわちポストモダン哲学）のスタイルとその効果について次のように指摘している。

「もっとも明瞭な文体効果 - パラドックスへの信仰、明晰さの拒否とまでは言わないにせよ、少なくともしつこいまでの複雑さの要求。……わざと逆説を弄する物言いや明快さを拒む言説の例を見つけだすのはたやすいことだろう（透明さを好むということは原理的に疑わしいことなのだから）。68年の哲学者＝ソフィストたちは、彼らの読者・聴衆に、理解し難さは偉大さのしるしであり、意味を求めるといった突飛な要求に対する思想家の沈黙は、無能力の証拠ではなく〈言い難いもの〉を前にしての忍耐力の指標であると考えられる習慣をつけさせることにより、そのもっとも大きな成功に到達したのである。」（26 - 28頁）

ソーカルとブリクモンの『「知」の欺瞞』ではほとんど取り上げられないジャック・デリダが、フェリーとルノーの『68年の思想』でやり玉に挙げられる。フェリーとルノーによれば、デリダのある種のテキストは「言説の言語的曲芸の自己満足」（27頁）である。そしてそれはまた「多産であると同時に神秘的な外観を強めていく。そのため、容易に推測できるように、なにが次第に独創的な企ての誕生と発展に自分は立ち合っているとひとは考えてしまうようになる」（158頁）。

ポストモダン思想の中でも、もっとも難解であるとしばしば考えられるのがデリダである。最近わが国で話題になった東浩紀の『存在論的、郵便的』という本も、デリダがある時期に特に神秘的で奇怪なテキストを書き続けたということが出発点となっている。また「二十世紀思想の孤独」と題して三島憲一と三浦雅士が行った対談では次のように言われている。

三島「……でも、デリダは私のバカな頭では読んでもわからないところがあるから、避けたところもあるけど。」

三浦「彼は絶対にわかりやすくしない。それがデリダの戦略ですね。」

三島「……フランスの現代思想は分析的に考えていけばわかるというわけではないですからね。「わかる」というカテゴリーにまで挑んでいるのは、すごいと

はと思いますが。まあ挑みたい人は挑んでいただいて、挑まない人を軽蔑しないことでしょうかね。」(「大航海」12号、新書館、1996年)

哲学や思想は、かつては誰にでも理解できるわかりやすい言葉で書かれていた。たとえ、表面的なわかりやすさの下に、より深い理解のために膨大な量の注釈や解釈の作業の必要性が隠されているテキストであるとしても、しかし少なくともそのテキストの文章それ自体は、誰にでも理解しやすい言葉遣いと文体で書かれていた。プラトンの対話篇ばかり、デカルトの「省察」ばかりである。プラトンのテキストが、最初からチンプンカンプンということはない。デカルトのテキストが、いったい何についてどのように書かれているのか、はなからさっぱりわからないということはないのだ。しかしいつの頃からか、より深い理解や難しい解釈に入り込むそもそもその前に、テキストそれ自体が理解不可能ということが、ごく当たり前のことになってしまった。例えば何でもよいが、たまたま手近にある哲学書を開いてみた。そこには次のような難渋な表現が見いだされる。

「……したがって、流れつつある現在化の統一を規定しているのは唯一の対象性に対する現在化の志向的関連であり、つまり、原現前呈示の位相の〈連続的に流れ行くこと〉を貫いて〈統一的に互いに属しあってまとまっている対象性〉として意識されるところのその唯一の対象性に対する現在化の志向的関連である。この統一意識が、知覚を現在化の統一へと結びつけるのである。このように、現前野がいかなる時間的幅をもつか、ということは、そのつど現前しているものの統一のされ方にかかっている。」(クラウス・ヘルト『生き生きした現在』新田義弘ほか訳、北斗出版、1988年、42頁)

この哲学書はほとんど全編にわたってこの調子が続く。もちろん現象学を専門とする哲学研究者には常識的で理解の容易なテキストなのであろう。しかし、である。あらかじめある程度の(いやかなりの程度の)哲学的トレーニングを受けた者でないと、このテキストは接近不可能である。それどころか同じ哲学研究者であっても、特に現象学に詳しいものでないと、このテキストの内容を理解することは困難である。普通のサラリーマンやOLにとっては、受ける印象はまるで線文字Aで書かれているのとたいして違わないのではないか。

もちろん容易でわかりやすければそれでいいというものではない。だが反対に、難しければ難しいほどいいというものでもまたないのだ。どうしてもこのような表現でなければこの内容を表せない、という場合も確かにあるであろう(現象学などは実はこれに当てはまるのかも知れない)。だが「難解イコール高尚・深遠」という風潮が哲学・思想の世界にはあまりにもしばしば見受けられはしないか。われわれはプラトンやデカルト、あるいはカントからさえ、ずいぶんと遠く離れたところまで来てしまったようだ。

難解であることは、果たして「進歩」の証なのであろうか。テキストの内容や表現が難解なものになったことは、それだけ哲学や思想が昔よりも高度なものへと進歩したことの証な

のであろうか。そして現代の難解な哲学・思想のテキストも時代の移り変わりとともに、易しいものとなってしまい、もっと後の時代のテキストは、ポストモダンのそれなど比較にならないほど、よりいっそう難解なものになってゆくのだろうか。逆に言うと、果たしてプラトンやデカルトのテキストは、現代思想よりもうんと遅れた、幼稚なものなのだろうか。しかしもちろんそんな馬鹿なことはあるまい。プラトン以降の哲学はすべてプラトンの脚注だと言った哲学者もいるほどである。もしもその哲学者の言うように、ポストモダンのテキストもその内容は所詮プラトンの脚注の域を出るものではないのだとしたら、つまり哲学や思想の主張する真理など、千年たとうが二千年たとうがあまり変わらないものなのだとしたら、それが表現される仕方だけがやたらと難解になっていくというのは、なんとも虚しいものである。

実はこれまで述べてきたようなことは、ポストモダン思想や現代哲学だけに当てはまるものではない。芸術の分野でしばしばわれわれが経験するのもこの種の問題である。とりわけ現代音楽や前衛芸術などがそうだ。われわれは誰しも、現代音楽のわけのわからない音律の連続を聴いたり、前衛絵画や彫刻の奇妙キテレツなオブジェを目の前にして、何とも言えない当惑とフラストレーションを経験したことがあるであろう（前衛演劇だってそうだ）。しかしわれわれは、さっぱりわけが分からないことを他人に知られることを恐れるあまり、あたかもわかったような振りをして（あるいはわかろうと努力している振りをして）眉間にしわを寄せ、しかめ面をしながらそうした芸術に対峙する。何か深遠で奥の深い意味をそこに探り当てようという虚しい試みを受けながら。パリのエッフェル塔は建てられた当時は非難ごうごうだった。しかし今では立派なパリのシンボルとしてフランス人や観光客に理解され、受け入れられている。エッフェル塔だけではない。あらゆる芸術や思想は、いつの時代にも前衛として生み出され、そしてしばしば人々の無理解という迫害を受けてきた。しかし時間がたつと立派な評価を受けるようになる。現代音楽の異様な音の衝突の連なりや見る者を当惑させる奇妙な彫刻のオブジェも、そしてデリダの神秘的なテキストも、後の時代には誰からもすばらしい芸術や思想だという評価を受けるようになるのだろうか。こうした事態が現代の前衛芸術やデリダのテキストに生来するかも知れない、という一種の不安がわれわれの心を捉えて放さないのかも知れない。

さて「真理は単純なものだ」と言ったのはオッカムである。ソーカルとブリクモンのセンセーショナルな『「知」の欺瞞』が改めて気づかせてくれたのは、われわれにはやはりオッカムのかみそりが時には必要なのだということである。ポスト・ポスト・モダン思想の登場は、ひょっとしたらそのかみそりの活躍によって実現するのもかも知れないのだから。